医事万華鏡

41．別離の季、言葉を思う

桜の開花が待ち遠しくなるこの頃は、暖かさも戻り始め、心浮き立つ季節です。と同時に卒業式や異動等、様々な別離とも重なることから、嬉しさも半ばなりといった感があります。とはいえ、そうした〝別離〟を、人が他者から物理的・心理的に離隔するだけのものに限定する必要はありません。そこには深い人格の成長を伴う手放し、断捨離という側面もあるように思うのです。

例えば、人はその人生の中でさまざまな習慣を身に付けます。それが一般的に悪いとされる習慣であるならば、当人はいつか変えたいと思うでしょう。そして何らかのきっかけで晴れてその悪習慣を手放せれば、その後の生き方はポジティブなものへと変わるでしょう。これもまた一つの別れであり、過去の自分からの卒業とも言えるでしょう。

またそういった過去からの卒業は、当然、他者との別れを契機としても起こり得ます。例えば、別れたい相手がいるとします。やはりそこには必ず理由があって、なぜ別れたいのか、本当に別れたい相手なのかを一旦考えてみる。その際、相手を見極めることは自分自身を深く知るということです。そうして考え抜いた後の自分は、もはや過去の自分ではない新たな人格を手に入れていることでしょう。もちろんそのときには、今まで拘泥していた相手は既にいなくなっているかもしれません。あるいはやはり別れは惜しいと感じるかもしれません。一方で、別れはまた新たな出逢いを孕んでいます。人間は後ろを向いてばかりでは生きられないようにできているようです。

ところで卒業式と言えば、先人から様々な含蓄のある「言葉」が贈られる機縁でもあります。ただそんな言葉に増して、私が強い印象を受けたのは、ドイツの作家ヘルマン・ヘッセが『クラインとワーグナー』（1919）の中で残した言葉です。それは〝本当に救いをもたらしてくれるのは悩むことだ。苦しみ、涙にくれながら人は大人へと成熟し、何度も打たれ痛い目にあいながら、完璧に鍛え上げられていく〟というもので、ありきたりな祝福の言葉とは一線を画しています。もちろんこの言葉自体は、卒業や別れの際に贈られたものではありませんが、ヘッセ自身が精神病の妻に先立たれ、悩み多き時期を経ての言葉であるため、純粋な感動を与えてくれます。もちろん、むやみやたらと悩めと言っているわけではありません。しかし懊悩を通して人は芸術を生み出し、文化は成熟してきました。困難は人を必ず成長させるものです。

昨今、いわゆる〝エリート〟とされる人々の言葉ににかつてほどの重みを感じなくなっています。上辺だけをなぞる言葉では、人の心を動かせません。未来の教育はどうあるべきか、今一度考え直す時期に差し掛かっているようです。

（JMS主幹・野村元久）